

まえがき

琵琶湖は、単に自然誌の上から見て貴重な生態系であるだけでなく、人との関係においても非常に古い歴史をもっており、世界的にみても、生態系と人間活動との関わりを考える上で、もっともふさわしい場のひとつであるといえます。しかしこの琵琶湖生態系の構造と状態は、近年大きな変化を示しており、われわれ人間の営みのさまざまな変化がその原因として指摘されています。

琵琶湖生態系の維持の上で、人との関わりを前提とした、具体的で現実的な解決の道を見出すためには、この問題に取り組む者が(1)さまざまな面から人間活動と生態系との因果関係(メカニズム)を探ると同時に、(2)問題の背後にある「人間活動がなぜ、どのように変化してきたか」という社会的背景についても理解を深め、その知識を互いに共有することが必要であると考えています。

このような観点から、琵琶湖を共通の研究フィールドとする、総合地球環境学研究所・「琵琶湖—淀川水系における流域管理モデルの構築」プロジェクト(以下、地球研・琵琶湖—淀川プロジェクト)と京都大学・生態学研究センターは、共同で「ヒューマンインパクトセミナー・シリーズ企画『琵琶湖は持続可能か?』」を、2004年度に3回にわたり開催しました。現在、琵琶湖生態系において、特に顕著でかつ深刻と考えられる現象を複数取り上げ、それぞれについて生態系側の論理・人間活動側の論理の両面からの理解と議論を深めるため、毎回両分野から1名ずつの講師をお招きしました。講演に当たっては、『琵琶湖は持続可能か?』という主題を掘り下げるために、企画者側であらかじめ：

1. 現状として琵琶湖はどのような系か
2. どのように変化したか、それはなぜか
3. 今後どのようにになると予想されるか
4. このままでよいのか、そうでないとすればどのような対策をとるべきか

という4つの基本となる問いを用意しました。講師の先生には、この4つの問いにそれぞれのご専門の見地から答えていただく形でご講演をいただき、その後、総合討論を行うという形式をとりました(目次参照)。

このセミナーには、研究者から一般の方々まで多くの方々のご参加をいただきました。講師の先生よりご紹介いただいた最新の知見はもちろん、さまざまな立場やバックグラウンドをもつ会場の参加者が1つのテーマについて交わした議論は、企画者らのプロジェクト研究の位置づけを考えるうえでも非常に大きな収穫となりました。もちろん、このシリーズ企画だけで琵琶湖の持続のための方向性が明確になった、とまでいうことはできません。しかし、

このセミナーでの議論を通じて、参加者の皆さんにも、私たちが環境問題の解決策を考えるときに、従来陥りがちであった人間活動側、生態系側からの互いへの対策の押し付け合いではなく、双方の立場を踏まえて現実的で包括的な解決策がどこにあるかを考えていくことの重要性を再確認していただけたのではないかと考えております。

本報告書には、上記シリーズ企画に加えて、2002年度のヒューマンインパクトセミナーにおける琵琶湖外来魚問題に関する2講演、さらに、流域管理に関わる研究活動・行政施策などについての新しい知見を得ることを目的として地球研・琵琶湖-淀川プロジェクトが別途開催した「足下を鍛えるセミナー」での3講演も併録しました。いずれも、同じ琵琶湖集水域～淀川流域を対象とした最新情報と示唆に富んだものであり、琵琶湖の環境問題を多面的に考える上で、上記シリーズ企画を補完する大切な視点を含んだ講演であると判断し、関係者の皆さまのご了解を得て、ここに合わせて収録しております。

最終章には、このシリーズの締めくくりとして開催した座談会の記録を収録しました。これは地球研・琵琶湖-淀川プロジェクトの現・前プロジェクトリーダーの両名が、琵琶湖をフィールドとして生態学、環境経済学の研究者としてそれぞれ琵琶湖環境問題に取り組まれてきたエキスパートお二人をお招きしておこなったもので、セミナーの11講演の内容を踏まえ、包括的な視野から、将来のビジョンとそのために今始めるべきことを語っていただきました。琵琶湖環境の保全を考える上で、一人一人が自分の立場からすべきことについて、非常に示唆に富んだ提言を示していただいています。

琵琶湖という同じ場に顕在化した多様な問題を多様な切り口から洞察した11の講演と有識者による座談会記録を1冊にまとめたことには、これらを並べてみることで初めて、その底に共通して横たわる琵琶湖環境問題の本質ともいえる背景と必然性を明確なストーリーとして浮かび上がらせることができるのではないかという意図があります。それは私たちが、問題の多面性とそれらを生み出す共通の背景と必然性を見据えた総合的な解決の方向性を探ることこそ、これからの琵琶湖環境問題を考える上で重要な姿勢であるのではないかと、そしてこのことは琵琶湖に限らずあらゆる環境問題について当てはまるのではないかと考えるからです。

この報告書をご覧になって、身近な環境問題についてもう一度考えていただくきっかけとしていただけたなら、編者らにとっての望外の喜びです。

編集者一同